

知床岬およびオケッチウシ地区の遺跡

金盛 典夫

知床博物館学芸員

本報告は知床半島総合調査の一環として、昭和56年度に実施した知床岬地区およびオケッチウシ地区の遺跡分布調査に関する報告である。

現地調査は5月28日～6月5日、7月14日～15日、9月24日の計3回行った。このうち、第1回は北海道大学北方文化研究施設による知床岬地区竪穴群の地形測量に同行したものである。また、第2回・第3回は地質部門・動物部門との共同調査である。しかし、これらはいずれも短時間であったことと、調査区域が知床国立公園特別保護地区であることなどから、発掘調査は行うことができず、いずれも表面観察による遺跡の分布状況の確認と部分的な測量をするにとどまった。

遺跡の確認された地点は図1・4に示したとおりである。以下、順次説明する。

1. 遺物散布地

アブラコ湾からあがる20m級の段丘上に石器の散布する個所がある。灯台用の発電所から20～30mほどはなれたところに低い土堤状の高まりがあり、これが灯台に向う道路によって切られている。このわずかな切通しの断面にみられる黒色土中から、少量の黒曜石片を採集した。いずれも小破片であり、石器の形態をなすものではない。土器は未確認であるため、遺跡の年代を推定することはできなかった。また、附近には竪穴等の遺構も見あたらないため、遺跡の規模としてはそれほど大きくないものと思われる。しかし、フリクの出土は、そこを居住地として石器の製作にあたった可能性もあるため、今後精査をする必要がある。

2. 竪穴住居址

上記1の地点からおよそ130m西の地点に1辺4～5m、深さ30～40cm程度の方形を呈する窪みが2ヶ所ある。床面は平坦であり、形状もはっきりしている。アイヌ期の住居址の可能性がある。松浦武四郎によって「夷人小屋五軒」（松浦、

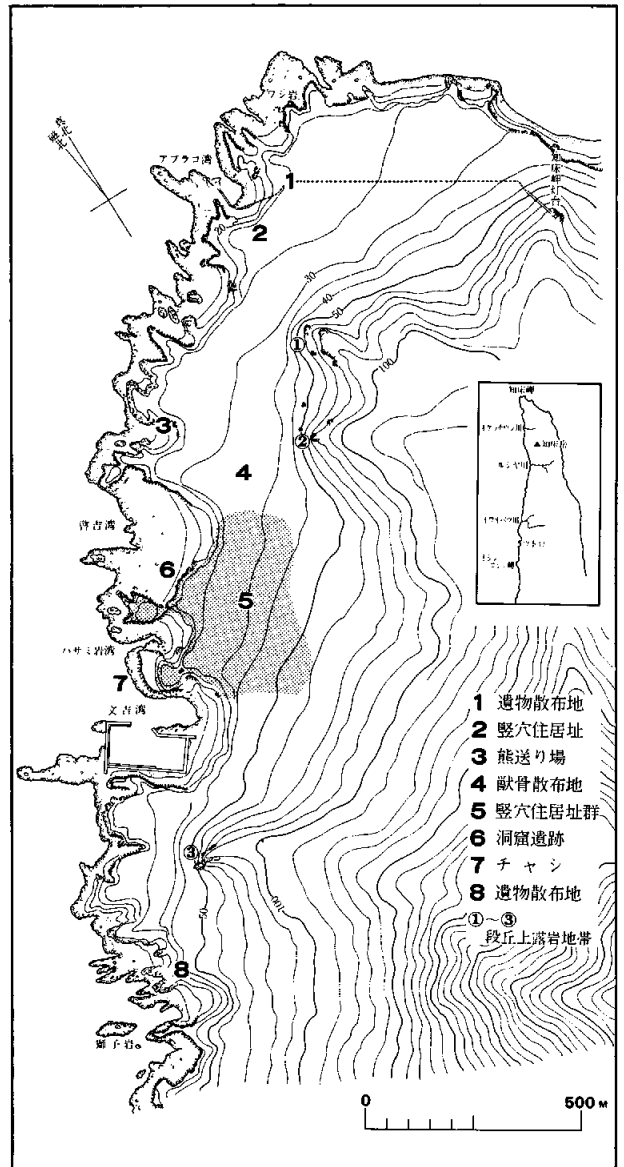


図1. 知床岬地区遺跡位置図

(地形図は斜里営林署斜里事業区基本図による)

1851)と記録されているものの一部であるかもしれない。

3. 熊送り場

啓吉湾の北東側に位置する無名湾から段丘に登る斜面の中腹に露岩がある。やや岩陰状を呈するが、露岩自体はそれほど大きなものではない。この遺跡は松下らによって報告されている(松下他、1961)ので詳細については省略するが、当時あったとされる一頭分のヒグマの骨は今回認めることができなかった。持ち去られたか、あるいは完全に埋没したものは不明であるが、確認のための発掘は行なわなかった。丸太には松材を用いているものもあり、交叉する部分には金属器による切りこみがある(写真1)。なお、同報告では所在地を「ワシ岩湾」としているが、通称「ワシ岩」と呼んでいるものはアブラコ湾の東側にある岩をさすもので、ここにもワシに似た岩があるため見誤ったものと思われる。

4. 獣骨散布地

後述する竪穴群の北東側のはずれに獣骨の散布する地点がある。周囲に丈の低いササが密生しているが、この地点にはセリ科の植物が青々と茂るため比較的判別しやすい。鯨の脊椎骨、トドの上腕骨など大型の骨だけが露出していたが(写真2)相当量の自然遺物が埋没しているものと思われる。竪穴群に伴う「物送り場」であるかもしれない。

5. 竪穴住居址群

文吉湾と啓吉湾をのぞむ段丘上に大竪穴住居址群がある。正確な数はかぞえていないが、100

基近くあるものと思われる。この遺跡はかつて松下らによって三度の発掘調査が行なわれた地点である。詳細については報文を参照願いたい(松下他、1961・1963・1964・1967)。また、昭和49年・50年に斜里町郷土研究会によって竪穴の測量調査が行なわれているが、短時間であったことと、悪天候にわざわざされて正確を期することはできなかった(金盛、1974)。このほか、北大北方文化研究施設によって岬地区全体の測量調査が進められている。一部未了の部分があつて報告はされていないが、これの完成によって竪穴群の全様は明らかにされるものと思われる。

これらの諸調査によって確認された遺跡の年代は、縄文晩期から続縄文期、オホック文化期、アイヌ期に亘るものであつて、そのうち竪穴群を構成する大半は続縄文期とオホック文化期であろうと考えられる。比較的浅く方形・円形を呈するものは続縄文期と思われ、これが最も多い。また、五角形もしくは六角形を呈する大形の竪穴はオホック文化期のものであろう(写真3)。大形の竪穴は段丘の縁にそつて分布するようである。

6. 洞窟遺跡

当初、灯台に近い段丘上の露岩地帯(図1の①)を調査したが洞窟遺跡は発見できなかった。②・③は未調査である。今回の調査で発見したのは啓吉湾内のものが唯一の例である。汀線から約50mの地点に露岩帯があり(写真4)、6ヶ所の洞窟があつた(図2)。このうちの第3号洞窟で人為的な配石遺構を検出した(図3)。間口8m50cm、奥

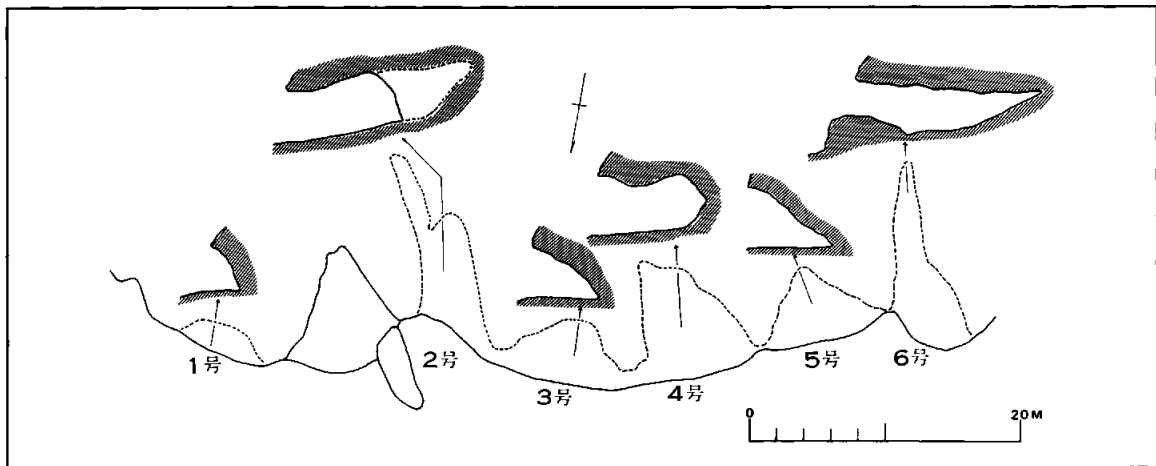


図2. 啓吉湾洞窟配置図

行5mの比較的小さな、洞窟というよりも岩陰というふうなものであったが、この中に幅5m、奥行4mの範囲に敷石がある。図の左側には流木を置いて境とし、下方に大きな角礫を並べている。点線の範囲には小円礫が敷きつめられており、右上に大きな角礫を配している。石中央部はもともと石を置いていなかったようである。下方の乱れた石は後に移動したものである(写真5)。これらの配石の上面には目の荒い砂が全面に敷いてあり、表面上は石の露出はわずかであった。

この洞窟からは人工遺物は全く発見されていない。したがって、使用年代は不明である。しかし、左端の丸太は腐植が進んでいるものの、それほど古いとは考えられない。熊送り場の木材とほぼ同程度である。古くてもアイヌ期のものであろう。

また、この洞窟には奥まで波による流木が堆積しており、時化の時はここまで荒波が押し寄せていることは容易に想像できる。したがって通年使用は不適當であり、ある一定の期間のみ利用したものであると思われる。

この湾の名称となった「啓吉」は、斜里アイヌの宮島啓吉が漁期になるとここへ来て漁をしたために名付けられたものであるという(広田好太郎氏による)。あるいは宮島啓吉の一時的な住いであったかもしれない。なお、隣接する文吉湾はウナベツコタンの坂井文吉が漁をしたために名付けられたといわれている。

7. チャシ

啓吉湾と文吉湾の間に突出する岬の基部に2本の浅い溝がある。チャシと考えてよいだろう。また、岬の平坦部には5基の竪穴がある。形状は円形に近いがいずれも浅い。年代は不明である。

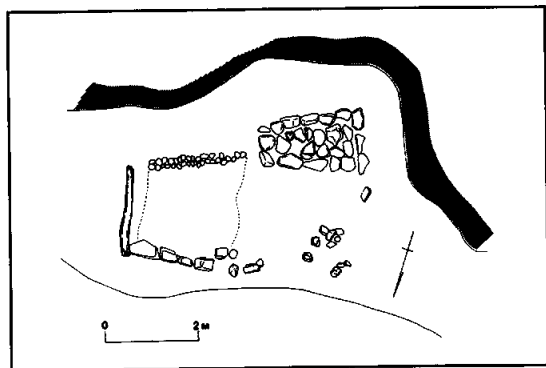


図3. 啓吉湾第3号洞窟配石図
(点線は、小円礫敷の範囲)

8. 遺物散布地

文吉湾を越えると西側にまた平坦面が続いているが、この段丘の西端で続縄文式土器と思われる細片を採集した。獅子岩をのぞむ小湾の縁である。しかし、この段丘面では竪穴は発見することができなかった。

9. 竪穴住居址

知床岬から約9km斜里側にオケッチウシ川がある。この左岸の台地上で2基の竪穴を確認した(図4)。1つは直径4m、もう一つは5mである。いずれも浅く円形を呈する。竪穴に伴う遺物は検出できなかったが、15mほど離れた個所で鯨の脊椎骨を1点採集した。加工痕は認められないが、附近の状況から判断して自然の力によって運ばれたものでないことは明らかである。図4の④にも洞窟はあるが人工遺物は確認できなかった。

以上、知床岬地区およびオケッチウシ地区で9ヶ所の遺跡所在地を確認した。松下らによれば知床岬の東側に墳墓があるといわれている(松下他、1961)ため、未確認ではあるがこれを加えると10ヶ所になる。このうち、年代の判明しているものは縄文晩期、続縄文期、オホック文化期、アイヌ期に亘るものであり、しかも、遺物散布地・竪穴住居址群・墳墓・洞窟遺跡・チャシ等、非常にバラエティーに富んだものとなっている。現在のわれわれの感覚からすれば不便このうえもない遠隔の地であるが、むしろ、われわれの身近にある

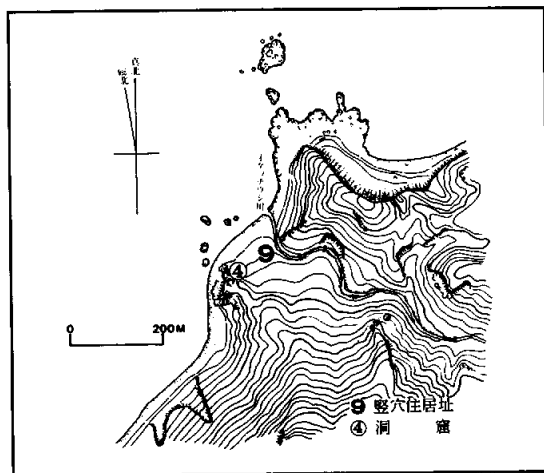


図4. オケッチウシ地区遺跡位置図
(地形図は斜里営林署斜里事業区基本図による)

遺跡よりも、その内容は豊富である。露岩地帯は一部を除いて未調査に終わったが、それらも精査することが可能となれば、さらに遺跡数は増えるものと思われる。



写真1. 熊送り場

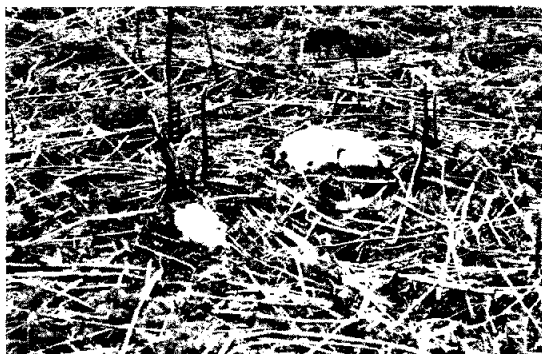


写真2. 獣骨散布地



写真3. 啓吉湾上の竪穴

- ### 引用文献
- 金盛典夫、1974：知床岬の遺跡。斜里町郷土研究、5、6—9。この時用いた竪穴の分布図は略測であって正確なものではない。翌1975年に改めて測量を行ったが未完成のままである。
- 松下 亘・畠山三郎太・安部三郎・武井時紀・高橋久志、1961：知床岬遺跡第一次調査概報。北海道の文化、創刊号、64—81。
- 松下 亘・畠山三郎太・安部三郎・米村哲英・大石克美、1963年：知床岬遺跡第二次調査概報。北海道の文化、特集号、76—88。
- 松下 亘・米村哲英・畠山三郎太・安部三郎、1964年：知床岬—知床半島の古代文化をさぐる一。市立網走郷土博物館報告、1。
- 松下 亘・米村哲英、1967年：知床半島の遺跡。北海道文化財、9、63—72。
- 松浦武四郎、1851年：再航蝦夷日誌。吉田武三校註、三航蝦夷日誌、下、吉川弘文館による。



写真4. 啓吉湾の洞窟全景



写真5. 啓吉湾第3号洞窟